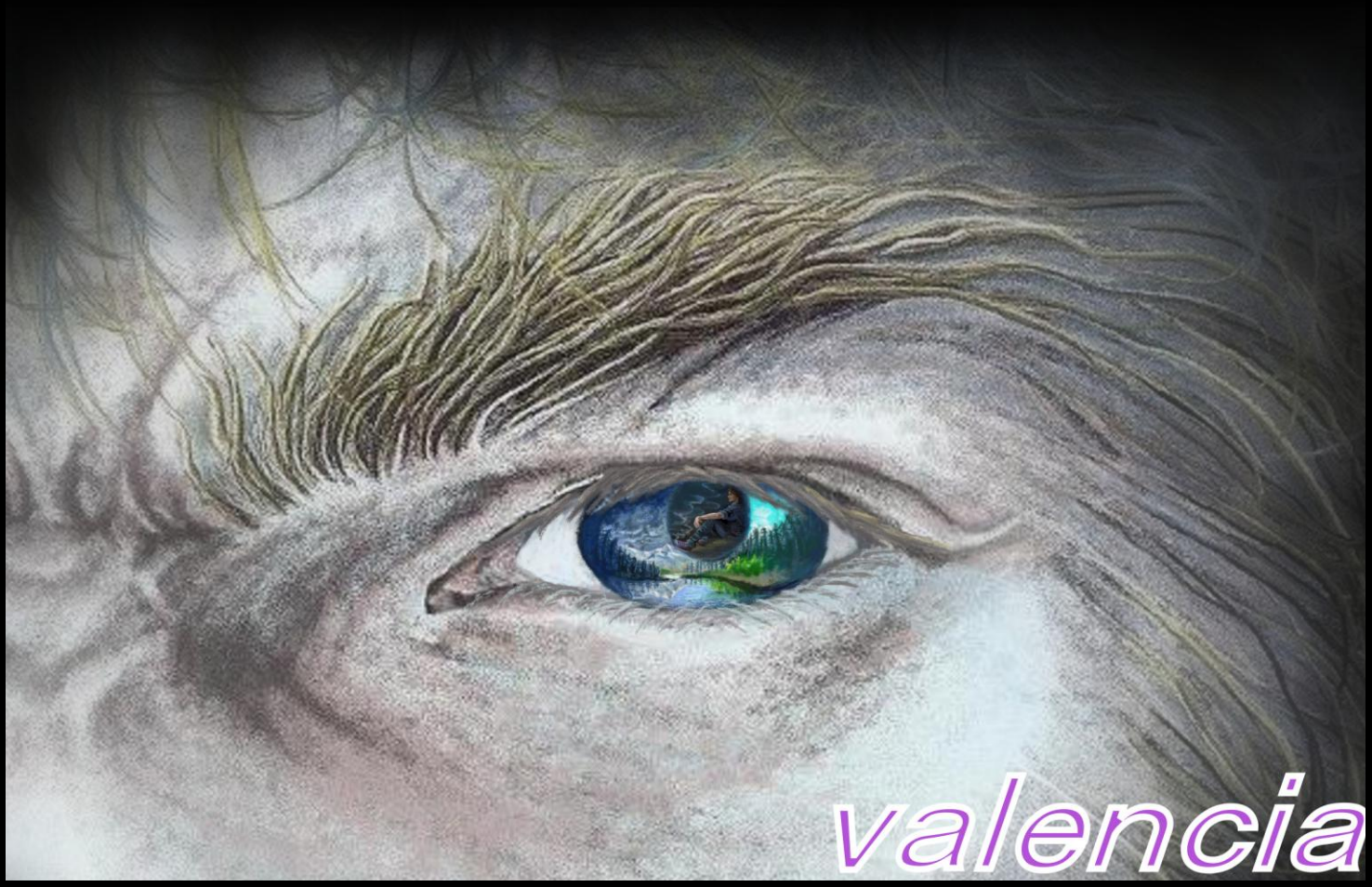
紫桜の果実



valencia

紫桜の果実

～ Shiou no Kajitsu ～

作・valencia

目次

・はじめに　4
・本編　5
・エピローグ　307
・side：イーゴリ　347

はじめに

この物語は、しばらく前に大きな戦争が終わっている、地球によく似た別世界のお話です。

ズキリとした痛みで意識が戻った俺は、ゆっくりと視線を巡らす。

見渡す限りの緑。雄大な自然……深い森の奥……頭にぼんやりと、そんな言葉が思い浮かぶ。

とりあえず自分が置かれた状況を把握しようと記憶を辿った。

テンジーク国際空港から国際特急に乗り、国境の町ヴィニーシャでブロガーのイーゴリ・ミルシュテリングと合流したのは数時間前のこと。その足で、やたらと町へ繰り出したがるイーゴリを説教しながら、俺達は予定通りの高速バスに乗りカークトゥスへ向かった。

窓の外には羊や馬の放牧地帯と、彼方に連なる山頂に雪を被ったツヴェーザ山脈。カミシロとはまるで違う大自然の美しさに次々と目を奪われた。すぐにでも撮影を始めたい欲求と闘いながら、シートへおとなしく収まり、

イーゴリと今後の予定を話し合う……そのうちに眠気に襲われ、……そして、今に至るのだろうか？　考え、即座に否定する。

夜更けに高速バスは終点の停留所、山麓のカークトゥスへ到着した。停留所近くの宿泊施設はどこも満室で、街へ出て宿を探そうと言うイーゴリを言い負かし、少しでも目的地へ近付くべく、まっすぐ俺達は標高二千メートルのツァンジャリー村を目指した。道中でモーテルでも見つけられたらチェックインして仮眠をとればいい

し、なければ野営でもいいだろうぐらいに俺は軽く考えていたのだ。その為の寝袋ならバックパックへ二人とも準備している。だが、歩きはじめて間もなく、イーゴリが正しかったことを思い知らされた。

六千メートル級の山並みが続くツヴェーザ連峰に囲まれた景勝地は、山麓とは言え夜歩きにはけっして向かない。灯りひとつない細い九十九折れの道は、懐中電灯を持っていてさえ見通しが悪い。どの田舎町にでも一定の間隔以内に街灯が立ち、安易に自販機が見付けられる

カミシロにいるときと、もっと早くに頭を切り替えるべきだった。ここでは頼りない空の月ぐらいしか光源がない。それも木陰や雲に隠れてしまえば真の闇だ。

野営をしようにも、でこぼことした足場を手探りで進んでいる状態では、寝袋を広げるどころか、腰を下ろして休憩する気にもなれない。だからといって、今さら降りて街へ出るには、山へ入り過ぎている。

恨み言のひとつも口にせず、イーゴリが黙って付いて来てくれているのは、彼の優しさゆえだろう。申し訳な

い気持ちを抱えるとともに、せめて文句のひとつでも言ってくれれば、故意に予定を狂わせてでも山を降りる決心が付いただろうかと、勝手なことを考えた。

そんな折、遠くに声が聞きとれた。

「テオじゃないかな」

一メートルほど後ろを歩いているイーゴリが、振り返った俺に首を傾げながら答えた。

首を傾げているということは、彼自身確信がないせいだろう。オウオウとも、フーフーとも表現のしようがな

い、呼応し合うようなその声は、なるほど複数の獣が会話をしているようにも聞こえる。

テオとはこの辺りに生息する猿の一種で、体長一メートル前後だと記憶しているが、辺りに集落があるのかもしれない。聳え立つ峰の彼方で、ときにやや近くの樫の木立の上方で、テオ達の呼応を聞きながら、憂鬱に暗い坂を上りゆく。

真昼にテンジーク空港へ降り立ち、ここまでは国際特急と高速バスで身体を休めていたとはいえ、碌に機内で

眠れなかった身に、深夜の山歩きは充分堪えた。坂を上り続けて何時間が経過しているだろうか。相変わらず休憩できるような場所も見つからない。

イーゴリが黙っているせいもあり、会話のない空気の重さが、疲労を際立たせているような気がした。不安定な傾斜でもいいから、一旦どこかで腰を落ち着けないかと提案しようとしたところで、不意に頭上を何かが素早く過ぎる気配を感じた。

「紫桜（しおう）、あぶないっ！」

ザザザッと木々を揺らしながら、それが急接近したため、とっさに大きく足を繰り出した俺は、そこに予想した地面がないことへ気付いて血の気が引いた。一瞬遅れて、左腕が強く引っ張られる……ジャケットの袖をイーゴリが握り締めているのだ。

踏み外した右足は土を抉りながら斜面を滑った末に、頼りなく空を蹴っている。体の重心も極端に崖へと傾いでいた。イーゴリは坂の上で足を踏ん張り、俺の滑落を食い止めようとしてくれている。しかし、再びそれが茂

みを揺らした次の瞬間、何かに攻撃を受けたようなイーゴリの悲鳴とともに、俺の身体は崖下へと投げ出され、そこで意識が途絶えた……。

「そっか……あそこから落ちたんだ」

裕に十メートルはあると思える急激な斜面を見上げる……そして、よく死ななかったものだと、逆に自らの強運へ感心する。

鬱蒼とした茂み。真っ青な空。既に日は高く上っている。

「そうだ、イーゴリ……あ、いててててっ……」
同伴していた友人が、共に滑落していたであろうことを思い出し、金髪のソヴェティーシュ人を探そうと身体を起こしかけるが、すぐにあちこちが悲鳴を上げて断念する。肩や背中、首の付け根が鈍く疼き、足首に突き刺すような痛みを感じる……空気の揺らぎで頬にもひりつきを覚えた……恐らく擦り剥いているのだろう。足首はひょっとしたら骨折でもしているのかもしれない。下着の湿り気にも気がついたが、今はそれどころではない。

ずるずると地面へ背中を戻し、友人の瞳と同じような色をしている、明るい空を見上げる。

つくづくイーゴリには申し訳ないことをした。彼は自分を助けようとして事故に巻き込まれたのだ……その前にも、せっかくの助言を無視して深夜の山へ入ってしまった。合流したら何と詫びようか……何より無事でいてくれると良いが。

不意に上方から声が聞こえてくる……オウオウ……いや、フーフーだろうか。

「この声……」

聞き覚えのある獣の鳴き声に反応して、感傷的な気分が一瞬で吹き飛ぶ。テオの呼応……それはあの滑落事故が起きる直前に聞こえていたものと同じだ。

互いに何かを伝え合う呼びかけ……あるいは警告を発しているのかも知れない。何に対して……侵入者の発見……？　気をつけろ……余所者を入れるな……そういう呼びかけではないだろうか。

オウオウ……フーフー……。伝達は仲間を招集し……

テリトリーへ侵入する外敵を排除する。オウオウ……フーフー……。
茂みが揺れる……そしてそれは姿を現す。
「嘘だろ……なんでこんなに……」
想像していた以上に、テオは大きかった。体格は一般的なカミシロ人成人男性と差がない……いや、四つん這いの背を伸ばせば、ずっと大きい筈だ。図鑑やネットの情報が間違っているのか、あるいはテオだと思っていた彼らは、また別の種類の霊長類なのかもしれない。

「来るなよ……畜生」
大型のテオは木々の狭間から、二頭、三頭と姿を現した。
オウオウ……フーフー……。高く、低く唸り声を発しているそれは、けっして友好的な空気を纏ってはいない。外敵への警告……なぜここにいる……立ち去らないなら攻撃するぞ……そう言っているのだろう。
踏ん張り、立ち上がろうとする……だが、少し力を入れただけで、利き足の足首は火が付いたように痛みを訴

えた。左足も膝から脛にかけて、盛大にデニムへ血が滲んでいる。これではどうしようもない。

「動けよ、この馬鹿っ……」

自分に呪いの言葉を発した直後、大きく木の枝が揺れ動くとともに、激しい空気の流動を感じた。仰ぎ見ると、目を見開いた獣の顔が間近に迫っていた。

「やめろぉっ……」

重い体重が圧し掛かり、地面へ強く背中を打ち付ける。

キィアーオウー……ッ。

高い雄叫びとともに襲い掛かってきたテオは、真っ赤な顔に皺を寄せ、大きな口から尖った犬歯を見せながら、威嚇を続ける。襲撃者は圧し掛かる一頭だけではない。

「うわあっ！」

払い除けようと振り上げた右腕に、激しい痛みを感じて振り向くと、側面から接近した別のテオに、肘を噛まれていた。

「放せっ！」

長い犬歯に袖を貫かれている腕を、痛みを堪えて必死

に動かし、咄嗟に蹴り上げた利き足で、噛み付くテオを蹴り落とす。骨折しているであろう足首のことなどすっかり忘れていた。

ウーーァアオゥー……ッ。

正面のテオが一際大きく唸りを発し、再び地面に戻される。次の瞬間、視界へ認めた光景に我が目を疑った。

「なんで……」

彼が群れのリーダーなのだろうか……正面のテオが大きく咆哮した瞬間、周囲で騒いでいたテオ達は水を打

ったように静まり返っていた。そして正面のテオが両腕を高く掲げながら背を逸らせ……股間にニョッキとそそり立っているものは、紛れもない男根の勃起だ。テオは自分を排除すべき外敵と見て怒っていたのではない……雌と見做して欲情し雄々しさをアピールしているのだ。

このままでは蹂躙される……だが、逃げ出そうにも身体は言うことを利かず、相手は一体何頭いるかもわからない。こんなところで、獣に犯されるのだろうか……観

念しかけたそのとき。

……ッ！

なんと表現して良いのか、皆目見当の付かない別の咆哮が、森閑とした崖下へ轟いたかと思うと、目の前にいたテオ達が揃って素早く顔を上げ、辺り一帯へ注意を払ったのが分かった。続いて大きく木々が揺れ動き、……金色とも銀色ともつかぬ、光り輝く者は一瞬のうちに現れ、正面のテオを片腕一本で追い払ってしまった。周囲にいたテオ達は、それが現れただけで脱兎のごとく茂み

の向こうへと逃げてしまう。群れのリーダーらしきテオも、地面へと打ちつけられた次の瞬間には、反撃する素振りも見せずに、森へと退散してしまった。

「テオ……ニク……？」

伝説と言われる生物の名前を口にする。自分を襲ってきたテオ達も大きかったが、彼らを追い払ったそれは、さらに大きな身体をしている。それがゆっくりと俺を振り返る。

金色とも銀色とも付かぬ美しい体毛に全身を覆われ、

瞳の色はイーゴリのそれよりもずっと青く澄んでいる……イーゴリがこのツヴェーザの明るい空であれば、この者は森のどこかにあるかもしれない深い湖だろうか。

彫りの深い目鼻立ちと手足や顔だけ剥き出しになっている硬そうな皮膚の白さは、不思議とイーゴリと同じソヴェティーシュ人を髣髴とさせる。想像していたアグリア人のような姿とは、少々雰囲気が異なった。助けられたせいだろうか、この巨大な獣を目の前にしても恐怖心はまるで湧いてこない。

「……」
「何……？」
それが何かを言ったような気がしたが、獣の鳴き声など聞き分けられる筈もない。その者はふいっと踵を返すと、のしのしと森へ帰っていく。
「へえ、二足歩行なんだ……」
自分を威嚇したときのテオのように、すっと背を伸ばし、二本の足で歩む姿は人間のものと変わらないようにさえ見える。ここにカメラがあれば、まさに待ちかねて

いた決定的瞬間が収められたことであろう。伝説のテオニクは実在した……テオを一瞬で追い払う光り輝くテオニク……見出しの文句が次々と頭へ浮かんでは消え、しかしこのままでは野垂れ死にしそうな現実が絶望を呼び戻す。せめて携帯だけでも見つかれば、救助を呼ぶことが出来るだろうが、今のところ、バックパックもPCも何ひとつ見つけられない……いや、見つかったとしても壊れているだろうか。自分は崖の上から転落したのだ。

「えっ……？」
不意に目の前が翳りキョロキョロと視線を巡らせる。森へ帰ったと思っていたあの生き物が、また自分の傍へやって来ていた。手に何かを持っている……花だろうか？
「……」
またそれが何かを言ったが、やはりわからない。
「ええと、これをくれるの……？」
男から言い寄られた経験がなくもないが、自分では男

だという意識を持っており、カミシロ人の平均身長よりも高く、外見が女性的というわけでもない。そんな自分が花を贈られるというのも妙な気分だが、くれるというのならば、ここは貰っておけばいいのだろうか……少なくとも悪意ではないだろう……などと、心の中で理屈を捏ねながら手を伸ばし、紫色の小花を受け取ると、とりあえず嗅いでみる。……ほんのり甘いがとくに良い匂いがするわけではないようだ。すると再び花を奪われて混乱した。不思議と、嗅ぐためのものではないと、軽い非

難を受けているような心持がした……そんなわけはないだろうが。
「へ……？」
戸惑っているうちに、その獣が俺にくれようとした花を食べてしまい、なぜか次の瞬間、抱き寄せられて……。
「お、おい……」
そして、あっという間に唇を奪われた……そうではない、咀嚼した花を口移しに含まされたのだ。
「は……むんん……」

柔らかな繊維とほろ苦さの入り混じった甘さと、そして甘ったるい芳香が、口の中で広がった。それだけで口腔がいっぱいになってしまうほど大きく熱い塊が口内を傍若無人に蠢き息苦しい。酸素を求めて首を動かし、だがすぐに追いかけられる。上顎や歯列、奥歯に歯茎……口腔にある神経という神経を余すところなく大きな舌先で刺激され、しまいに開きっぱなしの口の中が唾液でいっぱいになる。行き場をなくしたそれらを、已むを得ず、花と共に飲み下すと、とたんにえもいわれぬ酩酊

感が真綿のように自分の神経を包み込んだ。そのまま暫く口内を弄られる。息苦しさと、意味不明な解放感に突き動かされ、涙腺が潤んで涙が零れ落ちる。一体何をされたのか……自分がなぜこんな場所で獣などとキスをしているのか、わけがわからぬうちに、いつのまにか自分から獣に抱きつき、舌を絡ませ、肉の厚い口唇を啄ばみながら、夢中で応えていた。貪れば貪るほど実に気持ち良い……殊に獣の大きな舌を奥まで受け入れ、縦横無尽に暴れられ翻弄される感覚が、マスターベーションの

比にならないほどの快感だった。セックスと比較できないところは、どうか追及しないでほしい。

獣の唾液を飲み下すごとに不思議な酩酊感が増していく……一体自分はどうしてしまったのだろうかと考えているうちに、徐々に意識は混濁し、ふたたび底の見えぬ深淵へと落ちていった。その落下が妙に心地よかった。